

# インカ帝国の首都クスコに生きたパイオニア：西山音松の足音

熊谷 雄

(北海道大学大学院文學院博士課程／ペルー日系人協会クスコ 移民史・継承部長)

## 目次

1	はじめに .....	1
2	ペルーにおける日本人移民史 .....	2
3	西山音松の生涯 .....	6
4	西山音松のレストラン兼下宿「カリフォルニア」 .....	10
5	まとめ .....	13
	参考文献リスト .....	14

## 1 はじめに

ペルーは、ユネスコの世界遺産であるマチュ・ピチュ遺跡、クスコ市街、ナスカの地上絵<sup>1</sup>などの観光資源が豊富で、またペルー料理の人気の高まりから世界的に人気の旅行先の一つであり、マチュ・ピチュ遺跡やインカ帝国の歴史に寄せる日本人の関心は非常に高い。インカ帝国展が開催されれば高い関心を集め、インカ帝国の首都クスコやマチュ・ピチュ遺跡には多くの日本人が訪問しているのにもかかわらず、115 年以上前に日本人移民がクスコに移住をして、その子孫が現在もクスコで生活をしていること、クスコ生まれの著名な日系ペルー人がいることに関心を持つ日本人は少なく、その移民史や日系社会の現状は知られていない。初代マチュ・ピチュ村長であった野内与吉（1895-1969）の生涯については、野内家の子孫の努力により、2010 年代になってから、多くの日本人に知られることとなったが、他のクスコ

---

<sup>1</sup> マチュ・ピチュの歴史保護区（世界複合遺産、1983 年登録）、クスコ市街（世界文化遺産、1983 年登録）、ナスカの地上絵（世界文化遺産、1994 年登録）

の日本人移民は知られておらず、クスコの日本人移民史に関する調査や研究は行われていない。クスコに定住したパイオニアである和歌山県出身の西山音松（1884-1934）の存在は、ペルー映画界の創設者として国際的な評価を得たエウロヒオ・ニシヤマ（Eulogio Nishiyama González, 1920-1996）のルーツというだけでなく、クスコのレストラン兼下宿「カリフォルニア」の経営者という一面においても、単なる日本人移民の商業活動として矮小化されてはならない歴史的意義を持つ。ハイラム・ビンガム3世（Hiram Bingham III, 1875-1956）によるマチュ・ピチュ遺跡の「科学的調査の開始」<sup>2</sup>というクスコを世界的な考古学・観光の拠点として位置付ける歴史的転換点にクスコで生きた音松の歴史は貴重な事例である。

## 2 ペルーにおける日本人移民史

ペルーは、1873年8月21日の日秘和親貿易航海仮条約の署名により、中南米で最初に日本と国交を結んだ国となった。これを契機に、ペルーでは日本人移民を受け入れる環境が醸成され、その後、1874年に契約労働者としての中国人移民が中止された後の農業労働者の不足を補うという名目で、日本人契約農園労働が開始され<sup>3</sup>、南米最初の日本人の集団移民となる790名が乗船した佐倉丸が1899年4月3日にペルーのカヤオ港に到着した。契約移民が廃止される1923年までに総計約18,000人がペルーに渡り、また契約移民という形をとらずに既に移民している親戚、縁者らの下に身を寄せる「呼び寄せ移民」として渡航したものも多く、太平洋戦争が開始し、日本からペルーへ渡航ができなくなる1941年までに総計約33,000人の日本人がペルーに渡っている。<sup>4</sup>

---

<sup>2</sup> 1911年7月24日。

<sup>3</sup> 細谷広美（編）『ペルーを知るための62章』（明石書店、2004年）、p317。

<sup>4</sup> 細谷広美（編）『ペルーを知るための62章』（明石書店、2004年）、p319。

第二次世界大戦終了後は1950年からペルーへの移民が再開し、1989年までの40年で2,645人<sup>5</sup>がペルーに渡航しており、戦前の42年間と比較すると、その8%程度と戦後の移民数は非常に少ないことが明らかである。戦後にも多くの移民があったブラジル、アルゼンチン、パラグアイ、ボリビア等の南米諸国とは日系社会の発展に大きな違いがある。ペルーの日系社会は戦前の日本人移民1世<sup>6</sup>とその次の世代である日系ペルー人2世が発展させてきたことが一つの特徴であり、クスコにおいても戦前の日本人移民1世とその子どもの世代が日系社会を発展させてきた。

表1 北米、中南米における戦前戦後の日本人移民数

	国名	戦前移民者数(人)	戦後移民者数(人)	合計
		1868年-1941年	1950年-1989年	
1	ブラジル	188,985	71,372	260,357
2	米国	107,253	134,842	242,095
3	カナダ	35,777	11,226	47,003
4	ペルー	<b>33,070</b>	<b>2,645</b>	<b>35,715</b>
5	アルゼンチン	5,398	12,066	17,464
6	メキシコ	14,667	671	15,338
7	パラグアイ	709	9,612	10,321
8	ボリビア	249	6,357	6,606
9	ドミニカ共和国	-	1,390	1,390
10	キューバ	616	-	616
11	チリ	538	-	538
12	パナマ	456	-	456
13	コロンビア	222	-	222
14	ベネズエラ	17	-	17
15	ウルグアイ	11	-	11
北米・中南米合計		387,968	250,181	638,149

出典：国際協力事業団『海外移住統計』（1994年）、p116-119, p127-128 を基に筆者作成

<sup>5</sup> 国際協力事業団『海外移住統計』（1994年）、p116-119。ペルーからの移民の合計は2,615人となっているが、表に集計誤りがあったため2,645人とする。

<sup>6</sup> ペルーに渡った日本人移民の最初の世代を指す。次の世代を日系ペルー人2世、孫の世代を日系ペルー人3世とする。

ペルーにおける県別日本人移民在留者数やクスコ県の在留者数は、過去の文献から1924年<sup>7</sup>、1966年、1977年、1989年<sup>8</sup>のデータが確認できる。県別分布は下記のとおりで、いずれの年のデータもリマ県の構成比が75%から85%前後と圧倒的に高くなっており、クスコ県の構成比はいずれも全体の0.2%から0.3%となっており、クスコ在住の日本人移民の割合が低かったことが確認できる。西山音松がクスコで生きた戦前、契約移民終了時点の1924年のクスコ県の日本人移民は26名だった。

表2 ペルーにおける県別日本人移民在留者数及び構成比（1924，1966，1977，1989年）

No	県名	1924年		1966年		1977年		1989年	
		在留者 (人)	構成比 (%)	在留者 (人)	構成比 (%)	在留者 (人)	構成比 (%)	在留者 (人)	構成比 (%)
1	リマ	8,775	82.2%	30,178	86.6%	52,686	75.8%	38,492	84.3%
2	リベルタード	680	6.4%	972	2.8%	3,158	4.5%	1,633	3.6%
3	フニン	290	2.7%	919	2.6%	2,648	3.8%	726	1.6%
4	アンカシュ	211	2.0%	311	0.9%	1,554	2.2%	677	1.5%
5	イカ	199	1.9%	509	1.5%	1,575	2.3%	457	1.0%
6	ランバイェケ	176	1.6%	435	1.2%	2,179	3.1%	758	1.7%
7	マドリ・デ・ディオス	162	1.5%	394	1.1%	1,172	1.7%	856	1.9%
8	ピウラ	70	0.7%	153	0.4%	214	0.3%	293	0.6%
9	アレキバ	50	0.5%	75	0.2%	391	0.6%	357	0.8%
10	クスコ	26	0.2%	78	0.2%	194	0.3%	117	0.3%
11	ウヌコ	24	0.2%	295	0.8%	1,192	1.7%	109	0.2%
12	アヤクチョ	10	0.1%	57	0.2%	230	0.3%	36	0.1%
13	モケグア	5	0.0%	10	0.0%	104	0.1%	39	0.1%
14	サン・マルティン	0	0.0%	0	0.0%	281	0.4%	404	0.9%
15	ロレート	0	0.0%	48	0.1%	919	1.3%	401	0.9%
16	タクナ	0	0.0%	217	0.6%	194	0.3%	30	0.1%
17	プーノ	0	0.0%	33	0.1%	138	0.2%	0	0.0%
18	バスコ	0	0.0%	121	0.3%	403	0.6%	2	0.0%
19	カハマルカ	0	0.0%	22	0.1%	110	0.2%	10	0.0%
20	トゥンベス	0	0.0%	6	0.0%	84	0.1%	20	0.0%
21	ワンカベリカ	0	0.0%	5	0.0%	71	0.1%	0	0.0%
22	ウカヤリ	1	0.0%	6	0.0%	72	0.1%	205	0.4%
23	その他	2	0.0%	7	0.0%	73	0.1%	22	0.0%
合計		10,678	100.0%	34,838	100.0%	69,497	100.0%	45,644	100.0%

構成比別区分	
10%以上	
1%以上10%未満	
1%未満	

出典：伊藤力、呉屋勇（編）『在ペルー邦人75年の歩み（1899-1974）』（ペルー新報社、1974年）、石川友紀、米盛徳市『ペルーにおける沖縄県出身自由移民の都市集中と職業構成の変遷』（琉球大学法文学部紀要、史学・地理学篇、1984年）、国際協力事業団『ペルー国日系人実態調査報告書』（国際協力事業団、1992）を基に筆者作成

図1 在ペルー日系人各県分布図

<sup>7</sup> 伊藤力、呉屋勇（編）『在ペルー邦人75年の歩み（1899-1974）』（ペルー新報社、1974年）、p67。全ペルーの在留日本人は10,678人となっているがこれには調査漏れがあるとして約11,500人と推定された。

<sup>8</sup> 田島久歳、山脇千賀子『ブラジルおよびペルーにおける日系住民と教育に関する比較分析－歴史的経緯と現状－』（2000年）、p23, p29。1966年と1989年の日系人口調査は、全ての日系ペルー人（先祖に一人でも日本人を持つ人）を網羅していないとの指摘がある。1989年の調査は主にペルー各地に存在する日系組織を通じて実施されたため、日系社会とつながりを持たない人が調査から漏れている可能性が高い。在ペルー日本領事館の推定では1989年の日系ペルー人は約8万人と推定されている。

出典：伊藤力、呉屋勇（編）『在ペルー邦人 75 年の歩み（1899-1974）』（ペルー新報社、1974 年）、p244



### 3 西山音松の生涯

西山家の戸籍謄本によると、西山音松は1884年3月15日に和歌山県海草郡松江村（現在の和歌山市）に誕生した。両親は西山佐七、モトノで4人兄弟の末子だった。長男の安松とは16歳違い、長女トルノとは11歳、二女ムメノとは4歳離れた年の差が大きい兄弟であった。1902年4月、18歳の時に同郷の松本ツネノと結婚し、長女みさをが誕生したと音松の子孫には伝えられている。しかし、戸籍謄本によるとツネノは、兄の安松と婚姻し、みさをは安松とツネノの子と届けられている。そして、1904年1月に協議離婚、みさをは音松がペルーへ渡航後の1912年6月（当時10歳）に死去している。

図2 ペルー渡航前の音松の家族写真（和歌山県撮影、帽子を被った男性が音松）



出典：ニシヤマ家提供

1908年10月、音松は24歳で森岡商会の移民船、厳島丸で横浜港を出発し、単身でペルーへと渡航した。1908年12月にカヤオ港に到着した。船員811名のうち、

72 名が和歌山県出身となっており、和歌山県は鹿児島県、広島県、山口県、熊本県に次いで 5 番目<sup>9</sup>であった。また、音松の出身地である海草郡松江村からは 24 名<sup>10</sup>が同じ移民船で渡航した。そして、リマ南部のカニエテ耕地のサトウキビ畑に和歌山県出身者 72 名と共にカニエテ耕地に配耕された。その後の詳しい足取りは不明だが、音松が子供たちに伝えていた話によると、1909 年～1910 頃にペルー海岸地域のカニエテ耕地を離れ、山岳地域であるアンデスのクスコ移住した。クスコに移住後、現地の女性ヘスス・ゴンサレスとの間に 1914 年 7 月に長男シモンが誕生、クスコ市役所発行の婚姻証明書によると、婚姻の登録は 1915 年 5 月となっている。

---

<sup>9</sup> 伊藤力、呉屋勇（編）『在ペルー邦人 75 年の歩み（1899-1974）』（ペルー新報社、1974 年）、p39-40

<sup>10</sup> 和歌山県『和歌山県移民史』（和歌山県、1957 年）、p772



図3 音松とヘスス・ゴンサレスの結婚写真（クスコ、1913年撮影）



出典：ニシヤマ家提供



その後、彼らの間には1916年2月に次男アレハンドロ、1920年12月に三男エウロヒオが誕生している。1921年8月、当時37歳の音松は7歳の長男シモンを連れて、クスコを出発してリマに向かい、リマの在外日本公館でシモンの出生届を提出した。シモンの国籍取得入籍は同年10月<sup>11</sup>と記録されている。2人はその足で、1921年8月にカヤオ港から日本へ向かった。1921年10月に横浜港に到着し、和歌山へ帰郷している。1922年頃、音松はシモンを日本に残し、横浜港を出発して単身でペルー、クスコに戻った。そして、1923年頃に四男セサルが誕生した。1924年10月、40歳になった音松は再び日本へ渡航するためクスコからリマへ移動し、復航楽洋丸でカヤオ港を出発した。1924年12月に横浜港に到着し、和歌山に残してきたシモンと再会し、シモンの名前を禎一に改名する手続きを行った。1925年4月、安洋丸で横浜港を出発し、1925年6月にカヤオ港に到着し、その後クスコに戻った。1927年1月にクスコで五男フェリックスが誕生し、1929年頃には六男ホルヘが誕生した。西山音松は1934年3月、49歳でクスコにて死去した。

---

<sup>11</sup> 西山音松戸籍謄本。

図4 長男シモンを除く音松の子供の写真、左上から、四男セサル、六男ホルヘ、五男フェリックス、次男アレハンドロ、三男エウロヒオ（クスコ、撮影年不明）



出典：ニシヤマ家提供

#### 4 西山音松のレストラン兼下宿「カリフォルニア」

1911年7月24日のハイラム・ビンガム3世によるマチュピチュ遺跡の「科学的調査の開始」は、クスコを世界的な考古学・観光の拠点として位置づける歴史的転換点となった。当時、クスコへのアクセスは困難であり、太平洋岸のモジェンド港から1908年に開通した南部鉄道（Ferrocarril del Sur）でアレキパを経由し、数日間の行程を要した。この困難な旅路の終着点であるクスコには、外国人旅行者が安

心して宿泊できる施設が絶対的に不足していた。<sup>12</sup>このような状況下で音松の「カリフォルニア」が「クスコで最初の下宿の一つ」として機能していたことは、極めて重要な社会的貢献であった。音松が「カリフォルニア」を開業した1910年頃は、マチュ・ピチュ遺跡の「科学的調査の開始」以前であり、この事業選択は卓越した先見性を示している。当時のクスコは、1908年のパン・アメリカン科学会議(チリ、サンティアゴ)に参加したビンガムが帰路でクスコを訪れるなど、南米の古代遺跡への関心が高まっていた<sup>14</sup>。音松は、この潮流を早期に察知し、国際的な客層を想定した宿泊・飲食業を展開したのである。アルマグロ通りという立地選択も戦略的であった。この街路は、インカ帝国の首都として栄えたクスコの中心部に位置し、サクサイワマン、コリカンチャなどの主要インカ遺跡への容易なアクセスを提供するとともに、サン・ペドロ市場や商業地区との良好な接続を確保していた。さらに、商業活動と居住機能の適切なバランスを保った静穏な環境は、国際的知識人の滞在先として理想的な条件を備えていた。

---

<sup>12</sup> 1924年に出版された『Guía del Cuzco (クスコガイド)』には少なくとも3つのホテル(カサ・デル・アルミランテ、ホテル・コロン、プティ・ホテル)が記載されていた。(Giesecke, 1924, p. 14)。その10年後の1934年には、6つのホテル(合計で250人収容可能)と4つの簡易宿泊施設(合計で100人収容可能)が記録されている(Loayza, 2023, p. 70)。1911年に関する具体的な記録は存在しないものの、当時の宿泊施設のインフラはより限定的であり、おそらくアルマス広場や鉄道駅の近くにいくつかの質素な施設があった程度であったと推測するのが妥当である。

<sup>14</sup> Bingham, H. "Across South America: An Account of a Journey from Buenos Aires to Lima by Way of Potosí"(1911). Boston and New York: Houghton Mifflin Company. Preface.

図5 クスコの中心部に所在した「カリフォルニア」



出典：ベルナルド・ニシヤマ（音松曾孫）の情報を元に筆者作成

音松の家族の証言によれば、「カリフォルニア」の名物は子羊のロースト（Cordero asado）であった。また、音松の曾孫であるベルナルド・ニシヤマによれば、「カリフォルニアではチチャロン（Chicharrón、豚肉の揚げ物）も提供しており、料理を担当していたのは音松で、いつも店の入り口で接客と料理の両方を行っていた」という。この証言は、音松の経営スタイルについて重要な示唆を提供する。第一に、音松が単なる経営者ではなく、自ら調理を担当する実践的な料理人であったことである。第二に、店の入り口での接客と調理の同時進行により、顧客との直接的なコミュニケーションを重視していたことである。第三に、チチャロンという地域に根ざした料理の提供により、ペルー文化への深い理解と適応を示していたことである。チチャロンは、ペルーの伝統的な豚肉の揚げ物であり、特にアンデス地域では重要な蛋白源として親しまれていた。音松がこの料理を習得し、提供していたことは、彼の地域社会への統合度の高さを物語っている。また、店頭での調

理という方式は、料理の透明性を確保するとともに、揚げ物の香ばしい香りによる宣伝効果も期待できる効果的な営業戦略であった。子羊のローストとチチャロンの両方を提供していたことから、「カリフォルニア」は多様な顧客層のニーズに対応する包括的なメニュー構成を持っていたと推察される。子羊のローストは外国人観光客向けの西洋風料理として、チチャロンは地元客および地域に適応した揚げ物料理として、それぞれ異なる市場セグメントをターゲットとしていたのである。この二重構造は、音松の国際的視野と地域的適応力の両方を示す象徴的な事例として評価される。

## 5 まとめ

ペルーはマチュ・ピチュ遺跡やクスコ市街、ナスカの地上絵など観光資源が豊富であり、日本からの旅行先としても人気がある。しかし、115 年以上前に日本人移民がクスコに移住し、その子孫が現在も生活していることや、クスコ生まれの著名な日系ペルー人がいることはあまり知られていない。

本稿では、ペルーへの日本人移民の歴史を概観し、クスコへの初期の移住者である西山音松の歴史を分析した。西山音松の生涯は、単なる一移民の物語を超えて、クスコという地域の国際化と観光都市化の黎明期を生きた日本人パイオニアの軌跡として位置づけられる。マチュ・ピチュ遺跡の「科学的調査の開始」前後という歴史的転換点において、彼が営んだレストラン兼下宿「カリフォルニア」は、国際的な学術関心の高まりと観光業発展の先駆けとなる社会インフラを提供していた。これまで多くの日本人がマチュ・ピチュ遺跡やクスコを訪れているが、その多くは 115 年以上前から日本人移民がこの地に根を下ろし、地域社会の発展に貢献してきた歴史を知らない。音松のような先駆者たちの足跡を辿ることは、現代の私たちが抱くペルー・クスコへの憧憬の歴史的基盤を理解し、日系社会の継続的な貢献を再評価する契機となるであろう。

## 参考文献リスト

### （日本語文献）

石川友紀、米盛徳市『ペルーにおける沖縄県出身自由移民の都市集中と職業構成の変遷』（琉球大学法文学部紀要、史学・地理学篇、1984 年）、p21, p22

伊藤力、呉屋勇（編）『在ペルー邦人 75 年の歩み（1899-1974）』（ペルー新報社、1974 年）、p68, p93, p189, p244

国際協力事業団『ペルー国日系人実態調査報告書』（1992 年）、p39

国際協力事業団『海外移住統計』（国際協力事業団、1994 年）、p116-119

社団法人ラテン・アメリカ協会『日本人ペルー移住の記録』（社団法人ラテン・アメリカ協会、1969 年）、p174, p176

田島久歳、山脇千賀子『ブラジルおよびペルーにおける日系住民と教育に関する比較分析－歴史的経緯と現状－』（2000 年）、p23, p29

辻豊治『戦前日本におけるラテンアメリカ研究（Ⅱ）－大正末期～戦前昭和期における移民研究の進展 一』（京都外国語大学ラテンアメリカ研究所紀要、2020 年）、p160

坪居壽美子『かなりやの唄』（連合出版、2010 年）、p8, p35

日本移民学会（編）『日本人と海外移住 移民の歴史・現状・展望』（明石書店、2018 年）、p167

ペルー新報社『在ペルー日系人住所録 1966 Guia de la colonia japonesa 1966』（ペルー新報社、1966 年）、p17

細谷広美（編）『ペルーを知るための 62 章』（明石書店、2004 年）、p317、p319

山田迪生『日本移民船始末記 世界の艦船 1994 年 3 月号 第 5 回明治のメキシコ／ペルー移民』（海人社、1994 年）、p108

和歌山県『和歌山県移民史』（和歌山県、1957年）、p772

### （外国語文献）

Bingham, H. "Across South America: An Account of a Journey from Buenos Aires to Lima by Way of Potosí" (1911). Boston and New York: Houghton Mifflin Company. Preface.

Giesecke, A. (1924). Guía del Cuzco. La Meca de América del Sur. Imp. Garcilaso, p. 14.

Loayza Velásquez, S. (2023). Turismo, subvención y oferta hotelera. La conmemoración del IV Centenario de la Fundación Española de Cusco (1934). Turismo y Patrimonio, (21), p. 70